



卓 話



「曲がり角に来た日本の民間国際協力活動」

宗長寺住職 静岡刑務所教諭師
BAC仏教救援センター理事長
伊藤 佳通氏

日本のNGO(非政府組織)活動はわずか25年程度の歴史しかない。日本で、民間の活動が盛んになったのは1980年代である。それらのほとんどはカンボジア難民救援活動に端を発して、当時の活動は内容、意識ともにその名の通り「救援」の域を脱していなかったように思う。



すなわち、金品が有り余っていた日本から、それらが不足している国々に援助の手をさしのべるという構図が当たり前のもとして人々の心に芽生え始めていた。それを誰もが人道上立派な行為であると認め、多くの若者達が現地に飛んだ。難民キャンプでの救援活動に参加した学生に、それだけで単位を与えるという大学まで現れるなど、難民キャンプでの活動が一種の流行にまでなった。

そのうちに、現地で本当に必要なものは金品ではないことに気づく人が出始め、活動内容は物資の支援からソフト面の支援に移行するようになった。又同時に、富める側からの一方的な支援では問題の解決にならないばかりか、むしろ事態を悪化させてしまうことにも気づき、一方的な「救援」から両者が力を出し合う「協力」へ意識も内容も変化し現在に至っている。

ここまでの変化に要した年月は長かったが、産声をあげたばかりの日本の民間団体の成長に不可欠なものであった。こうした活動の先駆者である欧米に学べば効率は良かったのかもしれないが、自らが体験することで強固な基礎ができたと考えられる。

我々も活動を通じて日本の価値観で世界の物事を見ることがいかに無意味であるかを痛感させられてきた。1980年2月、初めてキャンプを訪れた時、真っ黒に汚れたパンツ一枚で走り回る子供達の姿は国内で報道されていた通りだったが、その表情の明るさには驚いたものだ。聞けば彼らの生活ぶりは祖国カンボジアにいたときと大差がないのだそうだ。食料が配給されるだけむしろ快適であるとかえりである。難民だから不幸というステレオタイプの

価値観は成り立たないと知った。

ところがそれが、別のキャンプでは違っていた。そこでは子供達もしっかりした服を着ていて、歌や踊りなど、クメール文化の保存に努力する余裕すらあった。彼らの場合は、キャンプ内での生活レベルは以前より悪くなっていた。

後に前者は虐殺を繰り返したポルポト軍兵士とその家族を収容したキャンプであり、後者はプノンペン市内に住んでいた一般市民を収容したキャンプであると聞いた。同じカンボジア国民を収容した難民キャンプ一つでもこのような違いがあるわけだから、目を閉じて象を撫でるとき判断をしてはいけないと、気を引き締めたものであった。

今でもよく見ていると、彼の地では身体の強度も我々とは比較にならない。子供達は素足でサッカーを楽しんでいる。石ころや木の切り株の残るグラウンドを走り回る。彼らの足の裏の厚さは、我々の比ではない。自分の柔な身体で物事を判断してはいけない。

後年になって活動を開始したバングラデシュの孤児院では、年頃の娘達がひどく汚れた下着を身につけていると知ってその支援を申し出た。すると「長く続かない支援なら最初からしない方がよい」と断られた。一度新しいものを身につけてしまったら、元には戻れないからである。良いことなら何をしても言い訳ではない。

我々が発展途上世界で活動をするときにはその国のレベルを熟知してから行うべきである。識字率が50%にも満たない国で、外国からの監視団がいなければできない選挙など無意味である。だからカンボジアでは選挙後も混乱が続いた。停電が何回もあるような国にコンピューターはいらない。国語と算数しか教えられず、一日の勤務時間が4時間程度の教師に職員室は無用だ。

発展途上世界は過去の日本によく似ている。内線が続いたカンボジアは戦国時代が終わった頃だ。革命から30年を経たラオスはようやく明治時代になった。復興めざましいベトナムは昭和30年代の日本そのものである。日本の繁栄は自らの手で勝ち取ったものだ。発展途上世界に無秩序な支援を続けることは、彼らの自助の道をふさぐことに他ならない。自ら汗を流し血を流すことで、真の発展が実現する。それをさせないで表面だけの発展を教えることほど残酷なことはない。虚像のグローバリゼーションは南北の格差を広げるだけだ。

中央分區 Intercity Meeting報告

廣本 慶一會員

最初の講演では麴町RCの河合さんがテーマに沿って講演をされた。

ロータリーは当初からCSRの観念を含む、職業奉仕を強調していた。

これはロータリーの先見性の現れである。ロータリーとライオンズの違いは、ロータリーは良き職業人の集まり、ライオンズは良き市民の集まりという点であろう。

これからも職業奉仕、CSRに努力していこう等々。

続いての事例発表では

「京王プラザホテルのエコロジーとバリアフリーへの取り組みを通じたCSR活動」

「資生堂の美しい生活文化の生活を目指してのCSR活動」

と大手企業の事例が2つ。

中小企業の事例として

「アイデザイン社の建築士としてのCSR活動をできること、やっていること」

「日清医療食品社の入院患者さんの健康を考えた病院食への取り組み」

の2つの事例。

各社の社会貢献活動がかなり具体的に発表された。

引き続き、河合氏の進行で、事例発表をされた4社をパネリストとしてパネルディスカッションが行われた。

CSRを意識して企業活動を行ってきたか、CSRとコンプライアンス・利益・広報活動などとの関連等について意見交換がされた。

最後に徳増氏による講評：

テーマがタイムリーであり、時間も2時間ととても中身の濃い会になった。

古宮ガバナーによる感想：

企業経営にしっかりとCSR活動を取り入れていく、とても勉強になった。